

# 40 Days of Depth

LENT SPIRITUAL GROWTH

BE TRANSFORMED THROUGH

---

CONNECTION  
PRAYER  
DEVOTION

---

日本語



KOBE UNION CHURCH



KOBE UNION CHURCH 2025

## はじめに (Introduction)

このデボーションは、イースターまでの **40** 日間、主とのより深い歩みへとあなたを導くために作られました。このデボーションの旅を進む中で、聖霊があなたに語りかけてくださるよう心を開いてください。神の言葉を黙想し、デボーションを振り返り、読んだ内容について誰かと分かち合うことで、主とのより親密な関係へと歩み始めることを願っています。

一緒に旅をしましょう！

オンラインまたは対面で、この **40** 日間、私たちと一緒に参加してください！

40 DAYS OF DEPTH

# 第1週

穏やかな水面  
3月6日 - 3月8日

# 第2週

上昇する潮  
3月10日 - 3月15日

# 第3週

隠された深み  
3月17日 - 3月22日

# 第4週

打ち寄せる波  
3月24日 - 3月29日

# 第5週

安定した流れ  
3月31日 - 4月5日

40 DAYS OF DEPTH

# 第6週

開けた水平線  
4月7日 - 4月12日

# 第7週

生きる岸边  
4月14日 - 4月19日

40 DAYS OF DEPTH

第1週

# 穏やかな水面

3月6日 - 3月8日

KOBE UNION CHURCH

## 第1週: 穏やかな水面 (Calm Waters)

3月6日

### 聖書朗読箇所: ヨエル書 2:12-13

主は言われる、「今からでも、あなたがたは心をつくし、断食と嘆きと、悲しみとをもってわたしに帰れ。あなたがたは衣服ではなく、心を裂け」。あなたがたの神、主に帰れ。主は恵みあり、あわれみあり、怒ることがおそく、いつくしみが豊かで、災を思いかえされるからである。

人の道は常にさまよい続けますが、神の道は確かです。人は潮のように漂い、自身の欲望の流れに揺れ動きます。しかし、どの時代においても、主は呼びかけます。「心を尽くしてわたしに立ち返りなさい。」これは表面的な呼びかけではなく、分かれた心を許すものでもありません。主は衣を裂くこと、外面的な悲しみの表現を求めているのではなく、心の裂けること、自己の意志が神の前で砕かれることを望んでおられます。

悔い改めとは単に罪を悲しむことだと私たちは思いがちです。しかし、本当の悔い改めは感情以上のものです。それは方向を変え、キリストに属さないすべてを捨て去ることで、祭壇の前で涙を流しても、変化なく通常に戻るだけでは不十分です。主が求めておられるのは、自己の意思を主の目の前で砕き、全てを主に委ねる心なのです。

多くの人が、自分自身を手放さずに神のもとへ戻ろうとします。彼らは神のそばにいたいと願いながらも、自分の人生の主導権を手放そうとしません。しかし、主はご自身の御座を誰とも分かち合われません。真に主のもとへ帰るとは、すべてを明け渡し、自我を十字架につけ、キリストが支配されることを受け入れることです。

この招きの美しさは、それを呼びかける主の本質にあります。主は恵みに満ち、打ち砕かれた心を拒むことなく迎え入れてくださいます。怒ることを抑え私たちの失敗に忍耐強くあらわれます。主は愛に満ちておられ、それは主ご自身の本質です。もし主が裁きを思いとどまられるとすれば、それは私たちの価値によるのではなく、その大いなる憐れみによるのです。

主のもとへ帰る時は、常に「今」です。もっと都合のよい時を待つのでは

なく、感情が動かされるのを待つのも  
ありません。「今こそ」と主は言われま  
す。私たちの全存在をもって主のもとへ

帰りましょう。すべてを明け渡し、主が  
私たちのうちにその御心を成し遂げられ  
るようにしましょう。

**「あなたが他のすべての虚しさを知るまでは、キリストの満ちた豊かさを知ることはで  
きません。」**

— チャールズ・スポルジョン

3月7日

聖書朗読箇所: マタイによる福音書 8:8

「ただ、お言葉を下さい。そうすれば僕は治ります。」

私たちの霊的な旅の中で、神の権威の偉大さに直面する瞬間があります。そして、その時の私たちの応答が、信仰の深さを明白にします。百人隊長は、権威と命令に慣れた者として、多くの人々が理解できない重要な真理を悟っていました。それは、イエスが物理的にそこにおられなくても、状況を変えることができるということです。主がただ語られるだけで、それは成し遂げられるのです。

私たちは、神の力を目に見える臨在によって制限しがちです。しかし、この百人隊長との出会いの中で、イエスをご自身の言葉が時間や空間に縛られないことを示されました。百人隊長は、イエスの権威が人間の限界を超えていることを理解し、ただ語られる言葉だけで癒しがもたらされるという驚くべき真実に信頼を置いていました。

信仰とは、目に見えるものや触れられるものではなく、神がすでに語られたことに基づくものです。すべてが自分の期待通りに進んでいる時には、神を信じることは容易でしょう。しかし、本当の信仰が試されるのは、神の目に見えない力を信じるよう求められた時です。主の言葉が、私たちの理解を超えたことを

成し遂げると信頼することです。「ただひと言おっしゃってください」と発言することは、どれほど遠く、どれほど不可能に思える状況であっても、イエスの権威がそれだけで十分であると認めることなのです。

キリストの招きは、目に見える証拠に依存するのではなく、神が最高の権威であるという理解の上に立つ応答を求めます。あなたは今日、主の言葉にどのように応えますか？目に見える形で「現れる」ことを待ち望んでいますか？それとも、主の声だけであらゆる状況を変えることができるというシンプルな真理に信頼を置いていますか？

イエスは百人隊長に言われました。「あなたの信じたとおりになるように。」(マタイによる福音書 8:13) これこそ弟子としての歩みの核心です。単に口先でイエスについて語るのではなく、私たちの生き方をもって従うこと。「見えなくとも信じます」という信仰こそが、神を喜ばせ、その御手を動かします。百人隊長は、イエスが目の前におられることを必要としませんでした。彼が必要としたのは、イエスの言葉に、不可能を可能にする力があると信じることだけでした。

あなたは今日、イエスの言葉をそのま  
ま信じる準備ができていますか？

**「信仰の最大の試練は、神が神であることを受け入れることです。」**

**—オズワルド・チェンバース**

3月8日

聖書朗読箇所: 詩篇 51:10-12

「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。わたしをみ前から捨てないでください。あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。あなたの救の喜びをわたしに返し、自由の霊をもって、わたしをささえてください。」

神が人の内面で成し遂げる最大の御業は、その人を通してではなく、その人の内側で起こるものです。多くの人には、新しく変化していない心のままで主に仕えようとし、外側の働きが内側を覆い隠せると考えます。しかし、ダビデはこの真理を理解していました。どんな行いも、努力も、犠牲も、彼の心を清めることはできません。ただ神だけがその御業をなすことができるのです。

人は自分自身を改革することはできても、清い心を創造することはできません。古いものは修復されるのではなく、新しくされなければなりません。本当に自分自身を砕いた者はこれをはっきりと悟ります。自分の内には何一つ信頼できるものがないことを。自分の力も、熱心さも、悔い改めすらも、十分ではありません。彼はただの矯正を求めるのではなく、新しい創造を求めるのです。

しかし、ダビデは清い心だけを求めたわけではありません。彼は揺るがぬ霊も求めました。なぜなら、どれほど心が清められても、すぐに罪へと戻ってしま

うなら、何の意味もないからです。本当に神を求める者は、ただ赦しを願うのではなく、義の中を歩む力を求めるのです。

「どうか、私をあなたの御前から退けないでください。」ここに、罪の本当の悲しみが表されています—それは単なる結果ではなく、神の臨在を失うことです。ひとたび神の近さを味わった者にとって、主から遠ざかることほど苦しいものはありません。これは、神との親しい交わりを知る魂の切なる渴望であり、決して離れることに耐えられない心の叫びなのです。

しかし、神の憐れみは私たちの失敗よりもはるかに大きいのです。罪が救いの喜びをかすませることはあっても、救いそのものを消し去ることはできません。だからこそ、ダビデは祈りました。「あなたの救の喜びをわたしに引き戻してください。」(詩篇 51:12) 救いは失われるのではなく、罪が私たちを神から遠ざけるときの、その喜びが薄れてしまうのです。しかし、私たちが神のもとに立ち

返るとき、主はただ赦すだけでなく、引き戻してくださいます。喜びを、力を、そして主に従いたいという心を。

この四旬節の時、私たちは自分自身を修復しようとする努力をやめ、代わりに、創造し、新しくし、引き戻すことのできる唯一のお方に、すべてを委ねましょう。

**「神が御霊で満たされるのは、御霊の満たしを信じる者でも、御霊を求める者でもなく、神に従う者である。」**

**— A.W. トーザー**

40 DAYS OF DEPTH

第2週

# 上昇する潮

3月10日 - 3月15日

KOBE UNION CHURCH

## 第2週: 上昇する潮 (Rising Tides)

3月10日

### 聖書箇所: イザヤ書 1:18

「主は言われる、さあ、われわれは互に論じよう。たといあなたがたの罪は緋のようであつても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ。」

神の招きは明確です。「来なさい」と。神は人々が自らを清め、ふさわしさを証明し、行いを正してから近づくのを待つてはおられません。神は、罪の中にあるまさにその時に、罪人を呼ばれるのです。必要としているのは正しい人ではなく、打ち砕かれた者、汚れた者、罪にまみれた者なのです。

緋色や深紅...深く消せない染み。古代の世界では、緋色の染料は繊維に深く結びつき、どんなに洗っても取り除くことができないほどの永久的なものでした。罪が魂に刻みつける印も同様であり、人間の力では取り除くことができません。どんな努力も、どんな道徳的な精進も、どんな儀式的な清めも、その存在を消すことはできません。しかし、私たちにできないことを、神はしてくださるのです。

ここで、神は部分的な清めを提供されるわけではありません。神は「変革」を約束されています。深紅のように赤い罪が、雪のように白く、汚れなく、純粹で、新しいものとされるのです。これは人間の努力の結果ではなく、神の恵みによるものです。主は罪と妥協することはありません。主はそれを完全に洗い流してください。

しかし、この約束は自動的に与えられるものではありません。それは「今来なさい、さあ論じ合おう」という招きと共にあります。神は救いを無理やり押し付けることはされません。神は呼びかけ、招き、差し出されるのです——しかし、それに応えるのは私たちの役割です。

神と論じ合うということは、神と口論することではなく、神の真理に心を委ねることです。それは、自らの罪を認

め、神の憐れみを受け入れ、私たちには  
できない働きを神に委ねることなので  
す。かつて釘付けにされたその御手は、

今もなお同じ招きをもって差し伸べられ  
ています。

「来なさい。」あなたは、来ますか？

**「東が西から遠いように、主はわれらのとがをわれらから遠ざけられる。」**

**詩篇 103:12**

3月11日

聖書箇所: ルカによる福音書 9:23-24

「それから、みんなの者に言われた、『だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを救うであろう。』」

キリストが人々を招かれるとき、それは「来て、死になさい」という招きです。弟子としての歩みは、単なる宗教的な感傷や自己改善への道ではなく、キリストにすべてを委ねるといふ召しなのです。そこに中途半端な姿勢や妥協の余地はありません。イエスに従うということは、自分自身の安全や確実さを捨て、完全に主に身を委ねることなのです。

「自己を捨てなさい。」この世界は「自己実現」を説きますが、イエスは「自己否定」を命じられます。弟子は自らの条件を決めるのではなく、人生のすべてをキリストの主権のもとに置きます。

彼は「何が得られるのか？」ではなく、「何を捧げるべきか？」と問うのです。

この自己否定は、自分自身の個性や存在を否定することではありません。むしろ、自らの意志を完全に神に委ねるといふ、全き降伏の行為なのです。

「日々、自分の十字架を背負いなさい。」

十字架は飾りではなく、「死」の宣言です。それは自分の栄光のために担うものではなく、キリストと共に自らが十字架につけられることを意味します。

十字架を背負うとは、一時的な決断ではなく、生き方そのものなのです。弟子は主に従いますが、それは安楽な道ではなく、苦しみ、拒絶、さらには必要であれば死に至る道なのです。

「自分の命を救おうとする者は、それを失い…」快適さ、地位、自己保身にしがみつ়く者は、結局、守ろうとしたものをすでに失っているのです。しかし、キリストのためにすべてを手放す者は、真の命を見出します。それは、永遠に続き、豊かで、真に自由な命です。これこそ、神の国の大いなる逆説です。自分を失うとき、私たちは本当の自分を見

出します。死ぬとき、私たちは真に生きるのです。

世はそのような生き方を嘲るでしょう。それを愚かだと呼ぶかもしれません。しかし、弟子は世の評価を求めるではありません。

**「十字架は、敬虔で幸福な人生の悲惨な終わりではなく、むしろキリストとの交わりの始まりに私たちを迎えるものなのです。」**

— ディートリヒ・ボンヘッファー

3月12日

聖書箇所: ヨハネによる福音書 8:12

イエスは、また人々に語ってこう言われた、「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」。

この世界は暗闇に満ちています。靈的な盲目、混乱、そして絶望が広がっています。人々は人生の中で真理を求め、見つけるのは影ばかりです。そのような暗闇の中に、イエスは語られます。「わたしは世の光です。」イエスはただ光をもたらすのではなく、ご自身が光なのです。多くの導き手の一人ではなく、罪に迷った世界において唯一の真の光なのです。

キリストに従うということは、影の中から踏み出すことです。中立の立場は存在しません。ある人々は闇を愛し、自分のやり方の心地よさを優先してイエスを拒みます。一方で、光を見て従う人々もいます。彼らは罪と自己中心の支配を捨て去ります。

光は隠れたものを暴き、光は変革をもたらします。キリストの存在は単なる選択肢ではなく、すべてを変える現実なのです。イエスの光の中を歩むということは、自分の知恵、自分の義、自分のやり方を手放すことです。それは、目が覚めた者として生き、世界をありのままに見つめ、その真理の確かさに基づいて前進することなのです。

「わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがない。」これは約束であり、同時に命令でもあります。キリストは、遠くから光を眺めるようにとは呼ばれません。従うことに招いておられるのです。すなわち、信頼して一歩踏み出し、完全にイエスに信頼し、その御臨在の輝きの中に生きることです。

引用:

「私はキリスト教を信じています。それは、太陽が昇ったと信じるのと同じです。ただ太陽を見るからではなく、その光によって他のすべてを見ることができるからです。

— C.S.ルイス

3月13日

聖書箇所: ペトロの手紙一 2:21

「あなたがたは、実に、そうするようにと召されたのである。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである。」

キリストに従う召しは、楽なものではなく耐え抜くものです。ペトロは苦しみが来るかもしれないとは言わず、それが私たちの召しだと言います。これは、単に苦しむこと自体が目的ではなく、意味のない痛みでもありません。それは、キリストご自身が歩まれた道であり、私たちもその足跡に従うようにと召されているのです。

キリストの苦しみは偶然ではなく、目的のあるものでした。彼は侮辱されても報復せず、不当な扱いを受けても不満を言わず、完全に御父の御心に従われました。ご自分の権利を主張するのではなく、公正に裁かれるお方にご自身を委ねられたのです。こうして、キリストは私たちに模範を残されました。それは、単に称賛するためではなく、実際に倣うべき模範なのです。

「その足跡に従うように。」弟子の道は自分で作るものではなく、すでに

キリストの足跡によって示されています。キリストは、苦しみにどう応えるべきかを教えてくださいました。忍耐と謙遜、そして揺るがぬ信仰をもって。十字架の道は、キリスト者にとって選択肢ではなく、必ず歩むべき道なのです。

これが弟子としての代価です。私たちは苦しみを求めるわけではありませんが、それが訪れたときには、恐れて後退するのではなく、キリストがそうされたように耐え忍びます。私たちの苦しみの中で、神は私たちがキリストの姿へと造り変えておられるのです。

このメッセージに、世は反発します。自己放棄ではなく、自己防衛を勧めます。しかし、キリストに従う者は失うことを恐れません。なぜなら、キリストの苦しみにあずかる者は、やがてキリストの栄光にもあずかると知っているからです。

「もしあなたが正しいことをしたために苦しむなら、あなたは預言者や聖人、そしてキリストご自身の歩んだ道を歩んでいるのです。」

—ディートリヒ・ボンヘッファー

3月14日

聖書箇所: イザヤ書 55:6-7

「あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ。悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる。」

この静かな瞬間に、主は私たちが彼の臨在に近づくよう招かれます。日々の慌ただしさや生活の騒音と要求に気を取られがちですが、イザヤ書の中で、神が近くにおられ、彼のあわれみが求めれば受けられること、彼の恵みが受け取れることを思い出させられます。

「主を求めよ、見つけられる間に。」これはただ探すことを意味するのではなく、立ち止まり、聞き、そして主の近さに安らぐことへの招きです。神は常に私たちが自分の元に招いておられますが、私たちが意図的に応答することが求められます。求める時があり、心を完全に神に向ける時があります。そしてその時は今です。

「悪しき者はその道を、不義な者はその思いを捨てなさい。」これは悔い改めの呼びかけであり、神から遠ざける

パターンを離れることです。行動を変えるだけではなく、心と精神の方向を転換することです。神は外面的な行動だけでなく、私たちの心を望んでおられます。

そして、美しい約束が続きます。「彼は彼らを憐れみ、自由に赦す。」どんなに遠くへ行ってしまっても、どれほど何度も迷い続けても、主は常に赦し、回復させ、私たちが迎え入れてくださいます。神の憐れみは、私たちの努力によって得られるものではなく、無償で、条件なく与えられる贈り物です。

今日、私たちが主を求めるとき、神の憐れみが私たちが待っていることを思い出しましょう。恐れることも、ためらうこともありません。神は近くにおられ、私たちにその恵みを注ぐ準備が整っています。

**「神を求める心は、必ず神を見つける心である。なぜなら、神はすでに近くにおられるから。」**

— アンリ・ヌーウェン

3月15日

聖書箇所: マタイによる福音書 6:16-18

「また断食をする時には、偽善者がするように、陰気な顔つきをするな。彼らは断食をしていることを人に見せようとして、自分の顔を見苦しくするのである。よく言うておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。あなたがたは断食をする時には、自分の頭に油を塗り、顔を洗いなさい。それは断食をしていることが人に知れないで、隠れた所においてになるあなたの父に知られるためである。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いて下さるであろう。」

私たちの霊的な生活には、祈り、断食、施しなど、神との関係を深めるための実践があります。特に断食は誤解されたり、誤用されたりしがちです。この箇所、イエスは断食の本当の目的と心を教えてください。

断食は他人に正しいと見せるためのものではありません。イエスの時代、偽善者たちは断食していることを皆に知らしめ、人々の称賛を求めました。しかし、イエスは別の道、隠れた道と呼びかけます。断食は私と神との間だけで行うもの。犠牲を顔や行動に表してはいけません。むしろ、静かな謙遜さで主とその意志を求め、他人がどう思うかを気にせず、主とその御心を求めるべきです。

「しかし、あなたが断食をする時は、頭に油を塗り、顔を洗いなさい。」イエスの指示はシンプルでありながら深い意味があります。私たちは日常を普通に過ごし、私たちの犠牲に注目を集めないようにしなければなりません。焦点は外見ではなく、私たちの心の内面の姿勢にあります。秘密の中で見てくださる父が報いてくださいます—他の人からの賞賛ではなく、神とのより深い親密さと、地上のどんな認識よりもはるかに大きな霊的な報いで私たちを祝福してください。

本当の断食は、私たちの行いを見せることによってではなく、秘密の中で神の前に謙遜に立つことによって、私たちを神に近づけます。

**「断食とは、神の御顔を求めることから私たちをそらすものを全て控えることです。」**

—リチャード・フォスター

40 DAYS OF DEPTH

第3週

# 隠された深み

3月17日 - 3月22日

KOBE UNION CHURCH

### 第3週: 隠された深み (Hidden Depths)

3月17日

#### 聖書箇所: ローマの信徒への手紙 12:1-2

「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである。」

これらの力強い2つの聖句の中で、パウロは私たちに徹底した献身と変革の人生へと招いています。その招きは明確です。私たちは、自分の行動や外見だけでなく、自分の存在そのものを生けるささげものとして神にささげられるようにと呼ばれています。旧約聖書では、ささげものは神への献げ物であり、しばしば価値あるものを手放すことが伴いました。しかし、パウロはこの概念を一変させました。死んだささげものではなく、「生けるささげもの」になるようにと私たちに求めているのです。これは一度きりの行為ではなく、私たちの人生、選択、心を絶えず神にささげることです。「神のあわれみを思って」。私たちが神に応答するのは、義務や恐れからではなく、神の恵みとあわれみを深く理解した

結果なのです。神は私たちにすべてを与えてくださいました。御子、赦し、愛、これらすべてを与えられた私たちは、その感謝の応答として自らを神にささげるのです。これこそが、私たちの真の礼拝であり、単なる儀式や外面的な行動ではなく、神への完全な降服を意味しています。

しかし、このささげものには目的があります。次に「心の一新によって変えられなさい」と勧めています。変革は、自らを神にささげることの実なのです。私たちはもはや、この世の価値観や欲望、そのやり方に形作られるのではありません。むしろ、神に降服することで、神は私たちの心を新たにし、私たちの願いを正し、私たちの心を神の御心に一致させてくださるのです。

この変革の結果は明確です。「  
そうすれば、あなたがたは、神のみこころ  
が何であるか、すなわち、何が良いこと

で、神に受け入れられ、完全であるのか  
を見分けることができるようになります。」

**「世はそのまま受け入れるものではなく、神の力によって変えられるものです。」**

— デイートリヒ・ボンヘッファー

3月18日

聖書箇所: エペソの信徒への手紙 2:8-9

「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行いによるのではない。

それは、だれも誇ることがないためなのである。」

これらの聖句の中で、私たちはキリスト教徒の人生において最も基本的な真理に直面します。それは、救いが完全に神の御業であるということです。救いは私たちの努力の結果ではなく、私たちが誇ることもありません。救いは、神の恵みによって与えられる、神からの賜物—無償であり、受けるに値しない贈り物なのです。

一旦立ち止まり、この意味を考えてみましょう。恵みは、自分の努力で生み出したり、引き起こしたりできるものではありません。それは私たちの働きではなく、神の御業なのです。もし私たちが恵みに何かを加えられると考えるなら、それは恵みの本質そのものを誤解していることとなります。私たちは、救いが完全に無償の贈り物であり、それを得たり、失ったりすることも自分たちの意思では管理できないという事実を受け入れなければなりません。

「あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われたのです。」ここでは、恵みと信仰は切り離せないものとして描かれています。恵みは私たちを救う神の力であり、信仰はそれを受け取る手段です。信仰は私たちの働きではなく、単に神の招きに対する応答なのです。

忘れてはならないのは、救いは一度きりの出来事ではないということです。信仰者の人生とは、恵みを絶えず受け取り続ける人生なのです。毎日、私たちは神から受け取れることを学び、神が必要なすべてを備えてくださると信じ、歩む一歩一歩において神に頼ることが求められます。これこそがクリスチャンの生き方です。それは自己努力の人生ではなく、神の恵みに依存する人生なのです。

救いは過去の出来事だけでなく、この瞬間も現実であることを忘れないでください。私たちは、自分の行いではなく、キリストの御業によって恵みにより

救われた者として、毎日を生きなれば  
ならないのです。

「恵みは神の最も豊かな宝であり、最もふさわしくない者に与えられます。恵みを受け  
取るには、自我に満ち、自分中心になっている心を空にしなければなりません。」

ーウォッチマン・ニー

3月19日

聖書箇所: ヘブライ人への手紙 4:15-16

「この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか。」

これらの聖句の中で、ヘブライ人への手紙の著者はキリストの大祭司としての麗しさと力を明らかにしています。イエスは、私たちの苦しみから遠く離れ、無関心な方ではありません。むしろ、私たちの弱さを深く理解しておられるお方です。イエスは、私たちが直面する誘惑、背負っている重荷、そして私たちを圧倒しようとする試練をよくご存じです。イエスは、遠くから無関心に見守るような大祭司ではなく、人間としての経験を共有し、誘惑され、試され、弱さを感じるとはどういうことかを完全に理解しておられるのです。それでもなお、イエスは罪を犯されませんでした。

これは私たちにとって深い慰めです。イエスは単に遠くから同情されたのではなく、私たちの経験の中に入り込み、人間の苦しみの重みをすべて背負われました。それは、イエスが私たちを神

の前に真にとりなすことができるためでした。イエスの共感は、受け身的なものではなく、能動的で、力強く、そして贖いの力に満ちています。旧約時代の祭司は、人間の経験の深さを完全には理解できませんでしたが、罪のない神の御子であるイエスは、完全な仲介者なのです。

「自信をもって恵みの御座に近づきましょう。」これはクリスチャン信仰の最も驚くべき側面の一つです。私たちは恐れや躊躇いをもって神に近づくのではなく、大胆に近づくよう招かれています。私たちが近づく御座は裁きの御座ではなく、恵みの御座です。私たちは弱さの中で神に近づくよう招かれ、そこで非難ではなく憐れみ、拒絶ではなく恵みを見いだすと確信しています。

どんなに心が壊れていても、どんなに大きな必要があっても、神の御座か

ら遠ざかることはありません。キリストによって、私たちの願いは憐れみで迎えられる、心は恵みで満たされると保証されています。これが福音の本質です。私た

ちは自分の価値に基づいてではなく、憐れみ深い大祭司であるイエス・キリストの功績により、神の御前に近づくのです。

**「私たちが神に最も満足しているとき、神は私たちを通して最も栄光を現されます。」**

—ジョン・パイパー

3月20日

聖書箇所: 詩篇 103:8-12

「主はあわれみに富み、めぐみふかく、怒ること遅く、いつくしみ豊かでいらせられる。主は常に責めることをせず、また、とこしえに怒りをいだかれぬ。主はわれらの罪にしたがってわれらをあしらわず、われらの不義にしたがって報いられない。天が地よりも高いように、主がおのれを恐れる者に賜わるいつくしみは大きい、東が西から遠いように、主はわれらのとがをわれらから遠ざけられる。」

神のあわれみは、信仰者の人生において壮大な現実として存在しています。それは、私たちの失敗にもかかわらず、再び神のもとへと引き寄せる、受けるに値しない圧倒的な優しさです。詩篇 103 篇で、ダビデは神のあわれみの広さを宣言しています。それは気まぐれで一時的なものではなく、不変で永遠に続くものであり、私たちの在り方ではなく、神ご自身の本質に基づくものです。

「主は、あわれみ深く情け深い。怒るのに遅く、恵みに富んでおられる。」これらは、神がわずかに持っている性質ではなく、神の存在からあふれ出し、神のすべての行いを形作る特質です。驚くべきことに、神はすぐに非難されるお方ではなく、怒りにすぐ燃え上がるお方でもありません。たとえ私たちが罪を犯したときでさえ、神が最初に示さ

れるのはあわれみです。私たちの最も深い失敗に直面したとしても、神の愛はそれをはるかに超えて、豊かにあふれているのです。

詩篇は続けて言います。「天が地の上に高いように、主を恐れる者に対する主の愛は大きい。東が西から遠く離れているように、主は私たちの背きの罪を遠くに投げ捨てられた。」この描写は、美しく、また謙遜を促すものです。神の愛は私たちが経験する地上の状況に制限されることはありません。それは無限で、限界なく、測ることができないものです。私たちの罪が取り除かれること、東と西の間の距離のように、これは力強いイメージです。神が私たちと私たちの罪の間に置かれた距離ほど大きな距離はなく、深い隔たりはありません。神は私たちを赦しただけでなく、私たちの罪を

完全に記憶から消し去ってくださったのです。

私たち人間の経験では、過去の過ちを思い出すことがあります。自分自身の過ちも含めて。しかし、神はそのあわれみによって、それらを投げ捨て、もはや思い出すことはありません。これこそが神の恵みの深さです。神は赦したこと

を忘れることを選ばれたのです。私たちが悔い改めて神のもとに戻るとき、神は過去の罪を掘り起こすことはなく、永遠の愛と恵みの視点で私たちを見てくださいます。

私たちは自問しなければなりません：私たちは神のあわれみの広さを理解しているのでしょうか？

**「神の恵みはそれにふさわしい者に与えられるのではなく、それを必要としていることを理解している者に与えられる。」**

— オズワルド・チェンバース

3月21日

聖書箇所: ローマの信徒への 8:1-2

「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない。なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである。」

ローマ人への手紙 8 章 1-2 節の深い宣言の中で、私たちはキリスト教信仰の最も解放的な真実の一つに出会います。「キリスト・イエスにある者には今や、罪に定められることはありません。」これは条件付きの言葉でもなく、可能性でもなく、現実です。キリストにある者にとって、罪のために受けるべき罰や罪の重荷は永遠に取り除かれました。かつて私たちの上に暗雲のように覆っていた定めは取り去られ、私たちは自由に立っています。しかし、この真実の深さを少し立ち止まって考えてみましょう。

キリストにあるということは、私たちの罪の罰がイエスにかかっていることを意味します。十字架での彼の犠牲、完璧な従順が私たちの義となりました。これは単なる赦しではなく、変革です。かつて私たちを支配していた罪と死の法則は、命を与える霊の法則に取って代わ

られました。聖霊を通して、私たちは新しい領域、すなわち自由の領域に入れられました。そこでは、私たちはもはや私たちを奴隷にしていた古い力に縛られることはありません。

かつて罪と死の法則は私たちを支配していました。それは私たちの行いを決定し、私たちを罪の結果に束縛していました。しかし、キリストにおいて、その法則は無力にされました。私たちを非難した法則は、霊の法則に取って代わられました。霊は命を与え、私たちにキリストが確保した自由の中で生きる力を与える方です。私たちは自分の努力に頼るのではなく、今や聖霊の命を与える力に参加し、罪と死に対して勝利を収めることができるようになったのです。

しかし、「キリストにある」ということが意味する重要性を忘れてはいけません。ローマ人への手紙 8 章 1-2 節の真実をただ認めるだけでは十分ではありません

ません。私たちは絶えずキリストにとどまり、彼の成し遂げた働きに安らぎ、彼が与えてくださる自由の中で歩まなければなりません。この自由は、私たちが自分の好きなように生きることを求めているのではなく、私たちを聖さと義に導く

霊の力によって生きることを求めています。自由への招きは、新しい命への招きでもあります。それは霊によって力を与えられ、キリストの愛によって特徴づけられる命です。

**「キリストは律法の終わりであり、それは律法が廃止されたからではなく、キリストがそれを成就したからです。」**

—ジョン・ストット

3月22日

聖書箇所: ヨハネの手紙 1 1:9

**「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。」**

ヨハネの手紙 1 1:9 の美しい簡潔さの中に、聖書の中で最も慰められる約束の一つが見つかります。もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は私たちを赦して下さるというものです。この節には複雑な条件や難解な式はありません。ただ、神の前に正直に謙遜に出るというシンプルな招きがあるだけです。これは、神が忠実であり正しいお方であり、常に赦し、清めてくださる心を示しています。

告白の行為は単に誤りを認めることではなく、神の恵みを必要としていることを認識することです。それは、自分自身を清めることができないこと、神のあわれみなしには無力であることを認めることです。聖書が教えるように、罪は単なる行動の積み重ねではなく、神との分離の状態です。それは私たちと創造者との関係を乱しますが、神は限りない恵みによって和解を提供してくださいませ。私たちが告白する時、私たちは神に

罪を告げるのではなく、私たちの壊れた状態について神と同意し、神の愛に向かって立ち返っているのです。

神は私たちを赦すだけでなく、**すべての不義から清めてくださいます。**神は私たちを徹底的に、完全に清め、何の汚れも残しません。これは表面的な清めではなく、私たちが神との正しい関係に回復させる深く、変革的な浄化です。告白を通して、私たちは赦しと更新の両方を経験します—新たな始まり、神の恵みの光の中を歩む新しい機会です。この約束が一度きりの罪に対してだけでなく、継続的な失敗に対しても与えられていることを覚えておくことが重要です。私たちは失敗したときに神から遠ざかる必要はありません。告白の過程は、私たちが打ち負かすためでも、私たちの不十分さを思い出させるためでもなく、私たちが最も必要とするその瞬間に、神が私たちが神ご自身に近づける方法なので

「キリスト教の生涯は、罪の不在ではなく、罪を意識し、それを告白する意欲です。」

ー ビリー・グラハム

40 DAYS OF DEPTH

第4週

# 打ち寄せる波

3月24日 - 3月29日

KOBE UNION CHURCH

## 第4週: 打ち寄せる波 (Crashing Waves)

3月24日

聖書箇所: テトスへの手紙 3:4-7

「ところが、わたしたちの救主なる神の慈悲と博愛とが現れたとき、わたしたちの行った義のわざによってではなく、ただ神のあわれみによって、再生の洗いを受け、聖霊により新たにされて、わたしたちは救われたのである。この聖霊は、わたしたちの救主イエス・キリストをとおして、わたしたちの上に豊かに注がれた。これは、わたしたちが、キリストの恵みによって義とされ、永遠のいのちを望むことによって、御国をつぐ者となるためである。」

テトスへの手紙の中で、神の計り知れない憐れみについて思い起こさせられます。それは私たちの理解を超えた憐れみであり、私たちの行いによるものではなく、私たちの善さや功績に基づくのではなく、ただ神の恵みと愛によるものです。「わたしたちの行った義のわざによってではなく、ただ神のあわれみによって。」ご自身の変わることのない本質に従って私たちに働かれます。神は慈しみ深く、愛に満ち、憐れみ深いお方なのです。

この世はしばしば「自分の行いに応じた報いを受ける」という原則で動いていますが、神のやり方はそれとは根本的に異なります。神は、私たちがそれに値するからではなく、ご自身が善であ

り、憐れみに満ちておられるがゆえに与えてくださるのです。私たちの救い主である神の慈しみと愛は、イエス・キリストというお方を通して現されました。そして、そのご顕現によって、私たちは救われたのです。私たちが経験する救いは、私たちの行いによるのではなく、まさに神の憐れみと恵みの結果なのです。私たちの救い主であるイエス・キリストを通して、この豊かな恵みは惜しみなく私たちに注がれています。無償で与えられた聖霊の賜物は、私たちの未来の希望—すなわち永遠のいのち—の確かな保証です。この希望は単なる漠然とした願いではなく、キリストの完成された御業と、永遠のいのちの約束に基づいた確信なのです。

この聖句は、神の憐れみの深い豊かさについて思い巡らすよう私たちを招いています。それは私たちが得るものではなく、無償で与えられるもの、限りあるものではなく、満ち溢れるものです。

永遠のいのちを受け継ぐ者として、私たちは神の憐れみに生きるよう招かれています。御霊によって与えられた新しいいのちを喜び、私たちを待ち受ける栄光の希望にあって歓喜するのです。

**「恵みとは、神の自由で、値しない善良さと好意です。」**

**— ビリー・グラハム**

3月25日

聖書箇所: ヨハネによる福音書 3:16

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」

ヨハネ 3:16 は福音の中心であり、神の愛の深さと彼が世に提供する深い贈り物を要約する節です。この言葉に、神の愛の本質が見えます。それは限られたものでも自己中心的なものでもありません。「神は世を愛して...」これは、国境、文化、時を超えて広がる愛です。失われた者、傷ついた者、そしてそれに値しない者をも追い求める、全世界への愛なのです。

神の愛の大きさは曖昧な愛情ではなく、具体的で犠牲的な行為に示されます。彼は言葉で愛を表現するだけでなく、ひとり子を与えてくださいました。イエスの贈り物は愛の究極の現れであり、すべてを犠牲にする愛です。父によって遣わされたイエスは肉体をとり、私たちの壊れた世界に入り、私たちの罪の重荷を負われました。十字架での彼の犠牲は私たちの救いの代価であり、彼の死と復活によって、信じるすべての者に永遠の命への道が開かれました。

この聖句は、信じることへの招きでもあります—すなわち、イエス・キリストの御業に信頼することです。「御子を信じる者は、滅びることなく、永遠のいのちを持つ」ここで言われている「信じる」とは、単なる知的な同意ではなく、イエスが誰であり、何を成し遂げられたのかに対する深く、人生を変えるような信頼を意味しています。

永遠のいのちの約束は、単に「長さ」だけのものではなく、「質」の問題でもあります。永遠のいのちは、ただ終わりなく生きることではなく、神の御前で生き、永遠にその愛と恵みを味わうことです。それは、創造主との関係の中で生きるいのちであり、この世の何もかも与えることのできない喜び、平安、そして満たしに満ちたものです。永遠のいのちは、私たちが信じた瞬間に始まり、未来の希望であるだけでなく、今この瞬間から現実として続いていくのです。

この聖句を思い巡らすとき、私たちは神の愛の計り知れない豊かさに驚嘆せずにはられません。それは、与える愛、犠牲を払う愛、そして私たちを新しい生き方へと招く愛です。そしてそれ

は、私たちの行いによるのではなく、イエス・キリストを通しての神の恵みによって、永遠のいのちを約束する愛なのです。

**「神の愛は、私たちの行いに基づくのではなく、神ご自身の本質に基づいています。」**

**—マックス・ルケード**

3月26日

聖書箇所: ピリピ信徒への手紙 2:5-8

「キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。」

ピリピ信徒への手紙 2:5-8 はキリストのへりくだりについての深い真理を示しています。パウロは私たちにイエスの心構えを持つよう呼びかけます。その謙遜と従順がすべての信者の模範となりました。この箇所でも最も際立つ真理の一つは、イエスが本来神の本質を持っておられたにもかかわらず、その神としての特権に固執しなかったことです。受肉において、イエスは神と等しいことを自分の利益のために用いるべきものとは考えず、むしろご自身の栄光を置いてこられました。イエスのへりくだりは、単なる態度ではなく、意識的な選択であり、人となって私たちの間に生きるという能動的な決断だったのです。

これがクリスチャンの謙遜の本質です。自分を低く見るのではなく、自分を少なく考えることです。C.S.ルイス

がかつて言ったように、それは自己卑下ではなく、権利、快適さ、欲望を他者のために明け渡す意志です。イエスの謙遜は弱さからではなく、彼が誰であり、来た目的を知る強さから生まれました。

イエスはしもべの姿をすることによって、真の偉大さは地位ではなく、仕えることにあることを示されました。彼は単に人間として現れたのではなく、しもべとして来られました。彼は、社会の疎外された人々、貧しい人々、そして疎まれた人々の中で生き、彼が説いたしもべのような愛を体現されました。イエスの地上でのすべての働きは、仕えることによって特徴づけられています。弟子たちの足を洗うことから、最終的に世界の救いのために命を捧げることに至るまで、すべてが仕える姿勢で満たされていました。

キリストの弟子として、私たちはその謙遜を模倣するように呼ばれています。それは単なる表面的な仕草ではなく、私たちの心の奥深くからのことです。私たちは、神と他者に仕えるために、私たちの特権や地位、欲望を捧げる

ように呼ばれています。十字架は、私たちが外面的にだけでなく内面的にも自己を捧げることを挑戦します。他者の必要を自分自身の上に置き、福音のために自分の時間、資源、そして時には名声さえも犠牲にするように求められています。

**「クリスチャンとは、ただ仕える者ではなく、すべてを犠牲にしてでも仕えることをいとわない者です。」**

**—ディートリヒ・ボンヘッファー**

3月27日

聖書箇所: ピリピ信徒への手紙 2:5-8

「キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。」

今日の世で、謙遜はしばしば誤解されます。弱さや自己否定と考えられますが、キリストの謙遜は力、愛、自己犠牲を表しています。ピリピ信徒への手紙 2:5-8 はイエスが私たちのために示された謙遜のあり方を力強く描いています。イエスは自分の神としての権利や特権に固執することはありませんでした。むしろ、自己を空にし、しもべの姿を取られました。これによって、真の偉大さは他者に仕えることにあり、仕えられることではないことを示されたのです。

イエスの謙遜は行動だけでなく心についてでした。彼は栄光に留まることを選べましたが、私たちの世界に、その闘い、痛み、不完全さと共に入ることを選びました。彼は神聖な地位を握り潰すこともできましたが、私たちのためにすべてを放棄しました。これが神の根本的

な愛—無条件で、自己を犠牲にし、捧げる愛です。

キリストの従者として、私たちは自分の人生において同じ心構えをとるよう招かれています。欲望や野心を脇に置き、他者に仕えるよう求められています。

イエスが十字架を忍ぶ意志を思い巡らすとき、謙遜にはしばしば代償が伴うことを思い出させられます。謙遜は決して簡単なものではありません—それは私たちの誇りや認識される必要性、そして時には自分自身の快適さを捨てることを意味します。しかし、そのようにすることで、私たちは神の愛と恵みをより深く体験することができます。十字架はイエスの謙遜の究極の象徴であり、同時に私たちへの彼の愛の究極の象徴でもあります。

ます。彼の犠牲を通して、私たちは癒され、赦され、回復するのです。

この季節に、イエスが示した同じ謙遜を持って生きるよう励まされましょ

う。他者に仕え、権利を放棄し、見返りを期待せずに愛すること。そして、謙遜の中で、私たちのために謙遜になられたお方に似る者となることを覚えましょ

**「謙遜とは自分を低く考えることではなく、自分を少なく考えることです。」**

**— C.S.ルイス**

3月28日

聖書箇所: イザヤ書 53:3-5

「彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。また顔をおおって忌みきらわれる者のように、彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった。しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめを受けて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。」

イザヤ書 53:3-5 は、イエスの犠牲の深さと私たちの救いの代償を強く思い起こさせる箇所です。これらの節は、私たちのために拒絶され、痛み、そして途方もない苦しみを耐え忍んだしもべの姿を描いています。キリストが軽んじられ、拒絶されたという表現は、彼が経験した孤独と苦悶、肉体的・感情的な痛みを表しています。彼は世界から拒絶されただけでなく、その目的も誤解されました。彼がすべてを耐え忍んだにもかかわらず、自己を復讐するために来たのではなく、世界の罪の重荷を背負うために来られたのです。

この節では、世がイエスをどう見ていたかと彼の犠牲の現実との間に鮮やかな対比が見られます。人々は彼が自身

の罪のために神に打たれたと信じたが、実際は他者の罪のために苦しんでいました。彼は私たちが受けるべき懲らしめを負い、私たちの背きがふさわしい痛み、苦しみ、神との分離を担いました。それでも、彼の苦しみには癒しがあります。彼に下った懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の傷によって私たちは癒されるのです。

これが福音の美しさです。彼の苦しみの中で私たちは平安を見だし、彼の傷の中で癒しを得ます。彼が耐えた痛みは無駄ではなく、私たちの贖い、罪の赦し、神との関係の回復のためでした。イエスの十字架の死は単なる歴史的事件ではなく、人類史の転換点、神が私たちが彼と和解させる道を開いた瞬間です。

「十字架は、私たちの最も深い悲しみが神の最大の愛に出会う場所です。」

— マックス・ルケード

3月29日

聖書箇所: ガラテヤ信徒への手紙 2:20

「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。」

ガラテヤ信徒への手紙 2:20 で、使徒パウロはクリスチャン生活の深い神秘—キリストとの一致—を要約します。

「キリストと共に十字架につけられた」とは、単なる神学的な概念ではなく、根本的な生き方です。パウロはすべての信者に深い現実を表現しています。罪と反逆で特徴づけられた古い自己が十字架につけられたのです。私たちはもはや自分のために生きるのではなく、彼の霊の力によって私たちの内に生きておられるキリストのために生きるのです。

この節は、福音の光の中で自分の人生をどう見るかを再考するよう伝えていきます。キリストと共に十字架につけられたなら、古い欲望、利己的な野心、罪、誇りはもはや私たちを支配しません。

神の子の信仰によって生きるとは、どういう意味でしょうか。それは、私た

ちの人生がもはや自分の力や意志で動かされるのではなく、イエス、彼の愛、彼の犠牲、彼の力に置く信仰によって動かされるということです。私たちを愛し、私のためにご自身を捧げられたキリストが今、私たちの内に生き、私たちが召された命を生きる力を与えてくださいます。私たちはもはや過去の過ちや失敗によって定義されず、彼にあって新しい命によって定義されます。

この真理を心に留めて生きるとき、私たちは自己承認の果てしない追求から解放され、代わりにもっと大きな目的...神の栄光のために生きるように呼ばれています。私たちの生き方は、神の愛と恵みの反映であり、すべての行動、すべての決断、すべての思いは、私たちの中に生きておられるキリストを中心に据えるべきです。

これは自分の力で努力する人生ではなく、私たちが愛し、ご自身を捧げられたお方の力に憩う人生です。そして、

彼への信仰によって生きるとき、彼は日々私たちを変えて、彼自身に似た者としてくださいます。

**「もはや私が生きているのではなく、キリストが私の内に生きておられる。今、私が生きている命は、復活された主イエスが信者の中に生きる命です。これがクリスチャンの最高の特権です。」**

—オズワルド・チェンバース

40 DAYS OF DEPTH

第5週

# 安定した流れ

3月31日 - 4月5日

KOBE UNION CHURCH

## 第5週: 安定した流れ (Steady Currents)

3月31日

聖書箇所: イザヤ書 53:3-5

「彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。また顔をおおって忌みきらわれる者のように、彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった。しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。しかし彼はわれわれのとのがために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめを受けて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。」

イザヤ書 53 章のこれらの節は、救世主イエス・キリストの深い苦しみと、私たちの救いの途方もない代価を明らかにしています。彼は肉体的に拷問されただけでなく、私たちの罪の重荷を負う者として感情的にも霊的にも砕かれました。「軽蔑され」「拒まれた」という表現は、彼が耐えた孤立と嘲笑を示しています。イエスはその苦しみの中で、人類の最も深い痛みにも共感し、壊れた者、拒絶された者、軽んじられた者すべてにとって完璧な救い主となりました。

イエスの死は、ただの良い生涯の不運な終わりではありませんでした。それは私たちの罪のために必要な犠牲でした。彼は私たちの罪のために突き刺さ

れ、私たちの不義のために打ち砕かれ、私たちが受けるべき罰はすべて彼に負わされました。その犠牲の結果として、私たちには平和が与えられます。それは、この世の一時的で儂い平和ではなく、神との永遠に続く平和です。

これを踏まえて、キリストの偉大な愛と、私たちのためにそのような苦しみを耐える彼の意志を振り返るよう招かれます。彼が提供する平安をどれほど当たり前と考え、その代価を考えないことが多いでしょうか。この箇所は、キリストの犠牲の重さと、彼の贖いの働きによって今私たちが享受している平和について、より深く理解するように私たちに呼びかけています。

「キリストの傷は偶然の結果ではなく、神の愛と贖いの意図的な計画によるものです。」

— ジョン・ストット

4月1日

聖書箇所: ヨハネの手紙一 4:9-10

「これが神が私たちに愛を示した方法です：神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。」

ヨハネの手紙一 4:9-10 で、私たちは愛とは何か、「神の愛」の最も明確な姿を与えられます。それは曖昧でも抽象的な概念でもなく、イエス・キリストの御人格に現れた具体的で命を与える現実です。神の愛は感情や言葉だけで示されたものではありません。それは行動によって示されました。彼はそのひとり子イエスを、壊れた世界に、私たちの罪のための贖いの犠牲として遣わされました。これが誰もが知り得る最大の愛です。

この愛の驚くべき点は、私たちがまだ神から遠く離れているときに与えられたことです。私たちが先に神を愛したのではなく、神が先に私たちが愛してくださいました。神への私たちの愛は常に彼の愛への応答です。私たちが罪と反逆の中にあってもかかわらず彼が私たちが愛したという事実が、この愛を根本的で美しいものにしていきます。それは無条件で、値せず、犠牲的です。

この愛はまた、人生を変えるものです。ヨハネは、キリストを通して私たちが生きると言います。これは単なる肉体の命ではなく、霊的な命、すなわち神との永遠の命なのです。イエスを私たちのために死なせることによって、神は私たちに自身への帰路を、和解する方法、神と平和を持つ方法、そして神が私たちのために計画した命の豊かさを体験する方法を提供してくださったのです。イエスが究極の犠牲を払った十字架は、神の愛の定義的な瞬間となり、私たちと神との関係を永遠に変えるのです。この愛を振り返るとき、私たちはただ受け取るだけでなく、それを反映するように呼ばれています。この愛は私たちが享受するためだけではなく、世界と分かち合うためのものです。神の私たちへの愛の深さを本当に理解するとき、それは私たちに同じように犠牲的な愛を他者に示すように促し、神が私たちに示してくださったのと同じ恵みと憐れみをもって愛するように導きます。

「神の愛は感情でも、一時的な情緒でもありません。それは意志の意図的な行為であり、ふさわしくない者に心を注ぎ出す決断です。」

— ティム・ケラー

4月2日

聖書箇所: ヨハネの手紙一 4:9-10

「これが神が私たちに愛を示した方法です：神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。」

ヨハネの手紙一の力強い節で、私たちは愛の究極の啓示、すなわち神の私たちへの愛に直面します。この愛は抽象的でも受動的でもなく、活動的で、具体的で、犠牲的です。神は「私はあなたを愛しています」と遠くから言うだけではなく、最も深い方法でそれを証明されました。彼は唯一の御子、イエス・キリストを壊れた墮落した世界に送り、私たちの罪のための贖いの犠牲となるようにされました。これが救いをもたらす愛であり、私たちを変える愛であり、命を与える愛です。

ヨハネがここで愛をどう定義しているかに注目することが重要です。彼は愛を人間の愛情として定義せず、私たちの神への愛に基づいてもいません。この箇所によれば、愛は神が私たちに向けて取った主導権です。私たちが先に神を愛したのではなく、神が先に私たちを愛してくださいました—私たちがまだ彼の敵であり、罪に迷っていたときにです。これが福音を定義する愛です。神が私たち

の壊れた状態に手を伸ばし、恵み、あわれみ、赦しを差し伸べることです。

御子を送られた神の犠牲的な愛は、私たちの人生の土台です。イエスを通して、私たちは生きる機会を与えられました。それは単に肉体的な命だけでなく、霊的に、そして永遠に生きることを意味します。十字架での死を通して、イエスは私たちが神と和解し、罪を赦され、神との関係の中で真の命を経験できる道を開いてくださいました。これこそが最も純粋な愛であり、愛する者のためにすべてを捧げる愛です。

この愛を振り返るとき、それは私たちに同じように他者を愛することを強く促します。神の愛を深く理解し、受け取るほどに、私たちはこの愛を切実に必要としている世界へと反映させるように召されています。神の愛は独り占めするものではなく、分かち合うべき賜物であり、宣べ伝えるべきメッセージなのです。

「最高の愛は愛されているから愛するのではなく、愛されていないときに愛するものです。」

— ウォッチマン・ニー

4月3日

聖書箇所: ガラテヤ書 2:20

「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。」

この力強い聖句の中で、使徒パウロはキリスト者の生き方の核心を語っています。「私はキリストと共に十字架につけられた。」この言葉は一見シンプルに思えますが、その意味は非常に深遠です。キリストと共に十字架につけられるとは、私たちの古い罪深い自己がキリストと共に十字架で死んだことを認めることを意味します。もはや古い「私」が生きているのではなく、キリストが私たちのうちに生きておられるのです。これはキリスト者の生き方の土台となる真理です。私たちのアイデンティティは、もはや過去や自分自身の力に根ざしているのではなく、キリストの内にある新しい命に根ざしているのです。

イエスの十字架は単なる歴史的事件ではなく、すべての信者にとって進行中の現実です。キリストと共に十字架につけられることは、彼の死に参加し、したがって彼の復活に参加することを意味します。

今、私たちが肉体において生きる命は、イエス・キリストへの信仰によって特徴づけられます。それは明け渡しと依存の命であり、すべての瞬間が彼の愛と恵みによって支えられていることを認めます。私たちはもはや自分の目的や野心のために生きるのではなく、彼の栄光のために生き、世に彼の愛と聖さを反映します。これは絶え間ない信頼を必要とする命—私たちが愛し、私のためにご自身を捧げられたお方への信仰です。

この聖句を黙想するとき、私たちはキリストと共に十字架につけられるとはどういうことかを深く考えるよう招かれています。私たちは、自分の古い自己がキリストと共に死んだことを意識して生きているのでしょうか？そして、今やキリストが私たちの内に生きておられることを実感しているのでしょうか？この現実、私たちの生き方、人間関係、そしてこの世界における使命にどのような影響を与えるのでしょうか？

「十字架は命への道、自由への道、平安への道です。それは苦しみの道ですが、勝利の道でもあります。」

— デイートリヒ・ボンヘッファー

4月4日

聖書箇所: ルカによる福音書 22:39-40

「イエスは出て、いつものようにオリブ山に行かれると、弟子たちも従って行った。いつもの場所に着いてから、彼らに言われた、『誘惑に陥らないように祈りなさい。』」

この聖句で、イエスは近づく試練の重荷を知りながら、オリブ山で孤独と祈りを求めている姿が見えます。弟子たちはそこまで彼に従いましたが、この重大な瞬間に、イエスの焦点は迫り来る嵐ではなく、祈りの必要性にありました。彼が直面しようとする戦いは魂の戦いでしたが、彼は弟子たち、そして私たちにとって、祈りが誘惑を克服し、試練の中で強くあり続ける鍵であることを理解していました。

イエスの言葉、「誘惑に陥らないように祈りなさい」は、招きであると同時に警告でもあります。弟子たちはこれから起こることを知らず、彼らが完全に理解していない方法で備えられていました。イエスは彼らの弱さ、それは私たちの弱さと同じものが誘惑の瞬間に露わになると知り、彼らに祈り、神から力を求めるよう促しました。

「誘惑に陥る」という表現は、神の助けなしには、私たちが人生の試練や

圧力に対していかに脆弱であるかを鋭く思い起こさせます。誘惑は常に突然の攻撃として現れるわけではなく、むしろ、私たちが霊的に弱っていたり、油断していたりする隙について、ゆっくりと、巧妙に心の中に入り込んでくることが多いのです。このことをよく知っておられたイエスは、弟子たちに祈るようと命じました。それは単に守りを求めるためだけでなく、誘惑に直面したときに揺るがずに立ち続ける力を得るためでもあったのです。

私たちの人生で、弱さの瞬間に祈りの必要性をどれほど見くびっているでしょうか。祈りは受動的な活動ではなく、神の力への積極的な明け渡しであり、抵抗し、忠実であり続け、彼の導きを信頼する力を神に求めることです。イエスは祈りが克服の鍵であることを知り、祈りによって前方の試練に備える力を得ました。

「人生で最も重要なことは何が起こるかを知ることではなく、彼を知り、彼が許すすべての状況の中で堅く立つことを学ぶことです。」

— A.W.トーマー

4月5日

聖書箇所: ルカによる福音書 22:42-44

『父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください。』そのとき、御使が天からあらわれてイエスを力づけた。イエスは苦しみもだえて、ますます切に祈られた。そして、その汗が血のしたたりのように地に落ちた。』

これらの聖句の中で、私たちはゲツセマネの園にいるイエスの姿を見ます。彼は地上での働きの中で最も深い苦悩に直面しておられました。迫りくる苦しみを前にして、その魂は悲しみに打ちひしがれています。イエスは父なる神に祈り、もし可能であれば別の道があると願われました。しかし最終的には、ご自身の意思ではなく、神の御心に従う決断をされました。「しかし、わたしの願いではなく、御心がなされますように。」この言葉こそ、真の降伏の本質を表しています。

この園での瞬間は、肉体の苦悶だけでなく、人類の罪の重荷と贖いの代価の感情的、霊的な混乱についてです。完全な神でありながら完全な人間であるイエスは、来るべきものの痛みと格闘しま

すが、服従を選びます。彼は恐れから苦しみを取り除いてほしいと求めるのではなく、父と私たちへの愛から求めます。

これが私たちが従うべき模範です。神の私たちの人生への意志と闘い、苦しみや困難を避けたいと思うことがどれほどあるでしょうか。それでも、イエスは服従の道が、たとえ痛みを伴うものであっても、神の栄光と彼の永遠の計画の成就につながることを示します。彼の最も暗い時に、彼は父の意志の善良さと知恵を信頼しました。

ここでのイエスの服従は、神を完全に信頼することが何を意味するかを力強く思い出させます。たとえ道が困難であっても、勝利への道は明け渡しによって舗装されています。

「クリスチャンであることは、すべてにおいてキリストに従う準備ができていること、苦しみに至るまでです。自分の欲望を明け渡す意志があるときにのみ、彼の栄光を真に経験できます。」

— ジョン・ストット

40 DAYS OF DEPTH

第6週

# 開けた水平線

4月7日 - 4月12日

KOBE UNION CHURCH

40 DAYS OF DEPTH

第7週

# 生きる岸辺

4月14日 - 4月19日

KOBE UNION CHURCH

40 DAYS OF DEPTH



[WWW.KOBEUNIONCHURCH.COM](http://WWW.KOBEUNIONCHURCH.COM)